CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk



# John Donne の知的偏重

## —— 特に彼の恋愛詩をめぐって ——

鬼　塚　敬　一

### 序

John Donne という詩人の最大の特性（genius）が異常な程度にまで発達した intellect から生まれくる，およそエリザベス朝の普通一般の詩人の感覚とは異なった，強烈な知的偏向性あるいは知的圧力であると言うことには，誰しも異論はないことと思う。

かくして，詩人のこの abnomal なほどの intellectual bias は彼の Physical な面や spititual な面の全体に亘って決定的な影響を及ぼさずにはおかなかった。

このような Donne の特質を Simpson 女史の巧みな言葉を借りて要約すれば，

> With Donne, it was not forms or colours or sounds as with Spenser, that excited his imagination and fired his fancy: but it was ideas. He was the most intellectual of poets, and the least dependent on his sense-impressions.1)

つまり，Donne は極めて主知主義な詩人であり，自己の感覚印象に依ることの極くまれな詩人だったわけである。Donne も現代詩人中の T. S. Eliot や T. E. Hulme などと同様に，生来，感性的な詩人ではなく，極めて思索的主知的タイプの詩人だったのである。

このような Donne の生来もつ intense な知性の圧力はイメージや詩語の取捨選択のうえにも決定的な影響力を振うわけであり，事実，詩人が，自己の恋愛経験や宗教経験の惹起する複雑多岐で subtle な内省的心情を表

現するためにその客観的相関物 (equivalent) を探し求めるときに，詩人のこの知性の熔鉱炉から創り出されるイメジャリーは，当然ながら極めて知的な要素の濃縮されたものとならざるを得なかった。言い換えれば，Donne が自己の心象を最大に適確に置換してくれる客観的相関物として，最も頻繁に好んで求め用いたものは intellectual なそれであったわけで，ここにエリオットが形而上詩人，殊に Donne のうちに発見した，かの思想観念と感情情緒との見事な統合 (unification) が達成されているのがみられるのである。

では，一歩進んで，かような極度の知的 bias の影響下に生まれ出るイメジャリーは，一体どんな特質や特色を具備したものであろうか。この点について，少し突き込んで考えてみたい。

これは，便宜上大きくほぼ三項目に絞ることが出来るであろう。

(イ) Donne が好んでイメジャリーを求める領域は，形而上派詩人達も含めて他の詩人達よりは，learned で erudite な方面に遙かに多くみられるということ。

(ロ) 既に述べたように，Donne の imagination や fancy を喚起し躍動せしめるものが姿形や色彩や音ではなくて，あくまで観念や思想であったということは，詩人のイメジャリーから視覚的で絵画的な要素や，感覚的で抒情的な色彩を多分に剝奪する結果になったということ。

つまり，究極の点において Donne のイメジャリーの全体が，更には詩全体が視覚的（あるいは風景的）心象や感性的心象の希薄なものとならざるを得なかった。

(ハ) Donne のイメジャリー（殊にこの場合，metaphor や simile を指すわけだが）にあっては，dilectical に展開する argumentative な要素の勝った，いわゆる展開イメジャリー (extended imagery) の形を被るものが数多い。

## I

では第一の特質から少しく吟味してみよう。

本来，Donne の形而上的な面，及び形而下的な面における諸経験の量と

その幅域は極めて広大かつ深遠なものであり，それは当時のペトラルカ調のソネット詩人や宮廷詩人（Cavalier Poets）は言わずもがな，他の形而上詩人達も到底匹敵し難い程のものであった。

形而下的方面における Donne の経験領域の豊かさは，今更とりたてて書き連ねるまでもないことと思う。若い時分だけのそれを拾い挙げても，カソリック教徒としての迫害から，二度に亘る海外遠征，Sir Thomas Egerton の秘書，さらに Anne More との駆落ち結婚等々枚挙にいとまがない程である。

一方，形而上的な面はとみると，この面でも前者に劣らず，否，それ以上に豊かであることが判る。ネオ・クラシシズムの規範の上にたって徹底的に Cowley や Donne などの形而上詩人たちを辛辣に槍玉にあげたかの Dr. Johnson でさえ，Dryden 同様に，この点だけははっきりと認めざるを得なかったものであり，

Donne was a man of very extensive and various knowledge.[2)]

と一歩譲って形而上的な側面における異常な程の経験の豊富さを指摘している程である。

詩人自身が後年述懐しているように，生来彼の "an Hydroptique immoderate desire of humane learning and languages" は Donne を駆って，中世のコラス哲学から神学，練金術，生理学，天文学，ニュー・プラトニズム，それから更にガリレーやコペルニクスらの提唱した New Philosophy 等々の諸方面の新旧の知識を追って，朝の四時から十時までも彼を書斎の机にくくりつけておかずには止まなかった。かくして，彼が詩作する場合には，この知識の宝庫から，思うまま，読者にとっては可成りに erudite で unfamiliar なものさえ時にはお構いなく，イメジャリーの素材を随時藉りてくるのである。

このようなために，実際，Donne のイメジャリーにおける metaphysical な学識のウェイトは極めて大きく，又，その及ぶ領域や variety たるや読者に熾烈な印象を焼きつけずにはおかず，ときによっては，ほとんど読む者を圧倒せんばかりのことすらみられる。たとえば "The Canonization",

"Aire and Angels", "A nocturnal upon S. Lucies day", "The Exstasie" 等々の詩篇はまさにこのような評言がぴったりとあて嵌る好個の例である。

But I am by her death, (which word wrong her)
of the first nothing, the Elixer grown;
　Were I a man, that I were one,
　I needs must know; I should preferre,
　　If I were any beast,
Some ends, some means; Yea plants, yea stones detest
And love; All, all some pro-perties invest;
If I an ordinary nothing were,
As shadow, a light, and body must be here
But I am None; nor will my Sunne renew.
　　(A nocturnall upon S. Lucies day,
　　Being the shortest day. LL. 28-37.)

この辺の事情を Eliot はこう言っている。

Tennyson and Browning are poets, and they think; but they do not feel their thought as immediately as the odour of a rose. A thought to Donne was an experience; it modified his sensibility.[3)]

だが，Donne が彼の作品中において盛んにスコラ哲学や天文学からの概念を引用するという態度は，あくまで普遍的真理を追求するというものではなくて，彼の好みの meta physical な概念思想をバラの花の香のように感じ，それを手にとり自家薬籠中のものとして重宝がり，ひとえに熱愛したのである。そして，外の詩人はいざ知らず，殊に Donne にあっては，それらの概念思想は直ちに他の諸経験と結合してひとつのイメジャリーを，更にはひとつの詩的世界を形ちづくるものであった。

では，この点を，今引用した "A nocturnal" からの一節を調べながら，もっと実証的に考えてみよう。

その一節には "The Chain of Being'" (万象の鎖) の概念が鮮かに下敷として利用されている。他の詩篇に目を移してみても，そこには angels の本質や姿についての言及，heaven's influence が地上の人間におよぶ有様，練金術の概念を援用しての Love の定義，及び恋愛の心理（学）的省察や分析等が鏤められていて，各詩篇の texture を間然するところなく構成しているのをみる。

しかも，なお，かような learned で recondite な概念といえども，常に詩の構成 (fabric) の中にガッチリと組入れられて，融合作用を経て，一定の深遠で精妙な emotion を生み出している事実を看過すべではない。これが誠に肝心なのである。上載の例に再び戻ってみよう。——詩人の恋人（あるいは妻）がこの世から逝った後，独り残された自分の喩えようのない虚脱や絶滅の感を，"The Chain of Being" の概念の枠中に溶かし込んで，これ以外の他のものでは到底表現しつくしえない程の dramatic な intensification の効果をいとも巧妙に収めているのが見られる。

"A Nocturnal" など最初一瞥した限りでは，恐らく，さながらスコラ哲学についての学術論文をみるかの感がするであろうが，然し詩人が狙っているのは決して中世以来の宇宙絵図の叙述でも解説でもない。あくまで，詩人の究極の意図は，この概念が詩の context のなかに完全に溶け込んで，それと全く同化しきって始めて，生れ出まる極めて intense な言いようのない絶滅感を創り出すことにある。

そこにはいわゆる Eliot の言う re-creation of thought into feeling (思想の感情への再創造) がよみ取れるのである。あるいは，Eliot 流に，これを direct intellectual (or metaphysical) apprehension of emotion と呼んでもさしつかえないであろう。

以上のことと関連して，Donne の場合もう一つの重要なことをみておく必要があるであろう。今まで述べてきたことからもおよそ推察がつくように，彼の場合，自己の経験の種類の如何を問わず，それが physical なものたれ，metaphysical なものたれ，これ等のもののどれ一つとして本質的に詩的でない (unpoetical) と見做されるものはなかった，ということであ

る。

ダンとほぼ同時代の Spenser やその流れを汲む一群の詩人たち，Ben Jonson の流れをひく宮廷詩人たち，それにペトラルカ調の sonneteers の間では，詩（poetry）と詩の素材との関係についてひとつの信仰が存在していた。つまり，ある種の言葉や事物が，例えば wood, meadow, flower, stream などの如きものが，本質的に詩的であると信じ込んで疑わなかった。彼等は詩（poetry, poem にあらず）は素材や用語の詩的本質に依存していると考えていた。Donne に典型的にみられるような難渋で learned な学識や，コンパス，平行線などといった類の素材にみられるような学術的なものとか，専門的なものとか，ひどく散文的で realistic で細部まではっきりしているようなイメージは馬鹿にコチコチで，詩の構成（フアブリック）のなかに溶解し得ないものであると信じられていた。

このような根強い思想は，15 世紀になって，プテナムなどによって強く提唱されたデコーラムなどの目にみえない基盤ともなっていたと見做されるものである。事実，16, 17 世紀の英詩では，デコーラムの原理がイメージを，その細部に亘って制約していたため，詩人はこの原理に従って使用すべきイメージに取捨選択を加える必要があった。

かような一種の〝信仰〟と根本的には同質の思想は，更に降って 18 世紀の Neo-classicism にたつ詩人達にも，否それどころか 19 世紀の Wordsworth や Coleridge などの詩論の底にも伺いうるものである。この点を更に詳細に知りたい人には，C・ブルックスの "Modern Poetry and the Tradition" の中の "Metaphor and the Tradition" をお勧めしたい。

かかる迷信じみた信仰やデコーラムの原理にいたずらにひきずり回わされることなく，Donne が当代の多種多様の metaphysical な諸概念を縦横に駆使して，それまで到底，詩の fabric の中に融合することは不可能と考えられていたひどく散文的で難渋な概念でさえも，（それらが詩の構成の中に溶け込んで，それ以外のものでは決して表現し得ない程の dramatic で intense な詩的世界を創り上げたという意味で）十分に poetic であることを作品の上で実証してくれた。この事実は英詩史上の一大革新であったに

相違ない。

先にも，Donne は如何なる種類の経験にもむしゃぶりつき amalgamate してしまい得るような感覚の機構の所有者であるということを指摘したが，その事も，Donne が，感情や情緒を形而上的な概念や思想を通して直接把握出来る力量をもった詩人であるということを言葉を換えて言い表わしたものに外ならない。

## 2

(ロ)の項で私は次のような意味のことを書いた。即ち，Donne の詩においてはそのイメジャリーたるや，人々の感覚や視覚に訴えかけるような類のものよりも，人の "cerebral cortex" をひねり回するような種類のものがほとんどを占めていると。

では，この点をもっと詳細にみてみよう。

先にも述べたように，確かに我々の情緒や視覚に訴えるような絵画的で sensuous な要素に富むイメジャリーは極く僅少ではある。が，全然の皆無というわけではない。

それは下記の実例が判然と示す通りである。

> Your gown going off, such beautious state reveals,
> As when from flowry meads th'hills shadow steals.
> (Elegie XIX. Going to Bed. LL. 13-4.)
> Gentle love deeds, as blossomes on a bough,
> From loves awakened root do bud out now.
> (Loves growth. LL. 19-20.)

ここには，確かに間違いなく，当時エリザベス朝のティピカルな詩材である牧場，森，花，樹木等のパストラルな感覚的な描写がはっきりと見てとれる。

以上のことからも判るように，我々が，Donne には生来感覚的な美，殊

に自然の風景美などに対する感受性が全く欠如していたと推断することはあまりに性急な意見と言わねばなるまい。それよりも次のように考えるのが最も妥当ではなかろうか。Donne はもし彼がその気になれば，スペンサー風のソネットも，更にはロマン派詩人の極めて感覚的な恋愛詩や叙景詩のような作品も書き得たのではなかろうか。いや，きっと他の詩人達に負けない程に感覚的な情緒的なイメジャリーの創造も出来えた詩人ではないだろうか。

だが然し，Donne の詩の大部分のものにおいては，ようやく結晶せんとしているそのような性質のイメジャリーも詩人の根源的な知性の嵐に吹きまくられて，ほとんどの場合，四散してしまいその後には唯いかにもごつごつした cerebral cortex に訴えかけるような intellectual logical expression のみが残骸のように横たわっているという具合である。

こう言う Donne の特質を更に深く illustrate するために，ここに，同一題材を作品中で取扱う場合，Donne, Drayton (1563～1631), Keats (1795～1821) の三様の詩人では，如何にその描写の方途が異なっているかをみてみよう。なお，この三人は一応各々，形而上派詩人，スペンサー風詩人，19 世紀浪漫派詩人の代表選手と見做してさしつかえないものであることも付言しておきたい。

その同一題材とは大気の calmness（凪）を詠んだものである。

最初に，Donne は彼の "The Calme" という作品の中で次のようにこの無風状態を叙している。

> … … … … … … ; and in one place lay
> Feather and dust, today and yesterday.
> Earths hollowness, which the worlds are,
> Have no more winde then the upper valt of aire.
>
> (LL. 17-20)

次に Michael Drayton は "The Sixth Nimphal" において，

The wind had no more strength than this,
That leisurely it blew
To make one leaf the next to kiss
That closely by it grew.
The rills that on the pebbles played
Might now be heard at will.
(The Muses' Elysium, LL. 5-10.)

最後に，Keats はかの "Hyperion" の中で，

… … … … … … No stir of air was there,
Not so much life as on a summer's day
Robs not one light seed from the feather'd glass,
But where the dead leaf fell, there did it rest.
(Book I. LL. 71-0.)

この三つとも程度の差こそあれ多かれ少なかれ，自然の一定の状態についての pictorial な感覚的なイメージを髣髴とさせずにはおかない。Donne においてすら，まさに最初の二行は Keats の "But where the dead leaf fell, there did it rest." と詞姿の点ですらほとんど同一化せんばかりの描きようである。ここにも Donne のもつ視覚的描写への capacity を看てとることが出来るのである。

だが，問題はその後に潜む。Donne の場合，最初の二行が過ぎて第三行目，"Earths hollowness, which the worlds lungs are" まで進むと最早さいぜんの visual な感覚的なイージはすっかり吹き飛んで霧散してゆくのをつくづく感じる。そこには，もう Drayton にみられるような自然の受動的な描写，automatic description をも見出すことが出来なければ，まして，keats の詩に見たような精妙な自然と詩人の情感の綾なす感覚のシンボリックな display も感じ取ることは不可能である。Earthh hollowness

have no more winde then the upper valt of aire" に滲み出ている argumentative な要素と，同時に "Earth's hollowness" を "World lung" になぞらえるといった far-fetched なコンシートじみたメタファ等によって，折角の初めの視覚的なイメージも霧散してしまったのである。言い換えれば，詩人の intense な知性の〝暴力〟の前に屈し去った格好である。

元来，知性が相手として求めるものは form や colour や sound ではなく，それはどこまでも観念や思想であるということは自明である。このことは，Donne の如く生来異常なまでに発達した主知的詩人の場合，最も典型的に現われた。form や colour や sound の世界から自己疎外した詩人では，モノをみる視点も "what?" の点からは少なく，多くは "How?" の点へと移行してゆくのも必然に予想される帰結であろう。

それでは，詩人の "Songs and Sonets" の中での女性の描写についてみてみよう。

そこには，先にも例示したように，あたかもスペンサーの "Faire Queene" を想起させずにはおかないような女性描写も二，三は確かに散見出来る。

> Your gown going off, such beauteous state reveals,
> As when from flowry meads th'hills shadow steals

然し，これなどは先ず例外的存在であるに過ぎない。

Donne の女性といえば，Crofts 教授が次のように不満気な評言を吐いている。

> Donne does not "see" his mistress, or even apparently, want to "see" her, but he is interested in the thought and feeling which the company, the existence of his beloved inspire in his mind or intellect.[4]

この指摘からも判る通り，大部分の詩篇においては，女性あるいは恋人が作品中の〝私〟なる主人公に対してどんな立場関係にあり，如何なる影響

（多くの場合心理的な）を惹起させるものであるか，等々のことをドラマチックにかつ弁証法的に表現する，というのが Donne の女性描写の定石ある。"Songs and Sonets" の読者などそこに女性の容姿や衣裳の華麗な描写などどんなものであれ期待することはほとんど出来ない相談であろう。

読者はそこに生血のかよった一人の〝人間〟更には〝女性〟としての女性像をキャッチすることは出来ないのであり，そこに見られる女性とは，およそ〝女性である〟という名札かあるいは鑑札のぶらさげられた一個の抽象化された観念的な女性だけである。読者が55篇の "Songs and Sonets" を読んで直感することはこのことであろう。つまり，論理的には55個の異なった女性像がそこに現われて当然なのであるが，だが実際は予想とは全く逆である。我々の印象に残るものは唯一個（一人ではないことに注目）のそれこそ全詩篇を通じて均質な無色透明な抽象化された〝女性〟という観念にすぎないのである。

このように，Donne の詩の場合，女性像に限らず，数多くのイメジャリーにおいて，visual な要素や sensuos な色彩が剝奪される結果を生んだのが Donne の観念や思想への強烈な指向性のゆえであることは，今までのことからも明白になったことと思う。

ところで，この点を "Songs and Sonets" や "Elegies" などの恋愛詩の場合，もっと突き込んで言えば，それは〝私〟なる主人公と恋人との間に何らかの性質の relationship を構成せんとする指示性の故であるとも言えよう。今までみてきた Donne の女性像のもつ抽象性や観念性のよって来たる原因も，つまりは，詩人の描く女性が，主人公 "I" との間に一種の relationship を構成せんがための点であり又，線であるに過ぎないからであり，それが空間中に一定のスペースを占有する物体からは程遠いものだからである。

考えるに，ひいては Donne の詩が他の詩人に見られぬ程に dramatic な構成と迫力を内含しているという事のファクターの一部も次のような点にひそむものと思われる。あらゆるものが，つまり，恋人や女性一般を始め男性や世間一般までが，ほとんどの詩篇においてその中の imaginary な主人

公との何らかの性質の relationship の枠の中にはめ込められているという事実にひそむのではなかろうか。そうして，この relatinship が孕む tension こそが，彼の詩をして dramatic な voltage の高いものとしていると考えることはあながち間違ってはいないであろう。

また，更に Donne の divine poems が love poems と同様，極めて passionate で，かつ dramatic な特質をもっと評されるのは，多分詩人と God との間の relationship の描述に重点が置かれているからであろう。Donne の基本的な考えでは人間存在の中心課題が神に対する relationship にあったということに，これはそもそも起因するものであろう。そのため Donne の宗教詩の場合，God に対する敬虔な信仰や祈りが詠みこまれていることは予想以上に少ないのであって，この点 J. Herbert などといささか異なるところであろう。J. B. Leishman の表現を借りれば，Donne の love-poems はいわば "the intensely personal drama of his relationship with a woman" であり，他方，divine-poems の方も同様，"the intensely personal drama of his relationship with God" という次第である。同じく Leishman の "The Monarch of Wit" の中に次の如き一節を見つけることが出来る。

> They (Donne's serious love-poems) are not pictorial, like Spenser's Epithalamion; they are not sensual and heartless, like Ovid and Dryden, but neither, on the other hand, are they ideal and transcendental like Dante and Petrarch. They are not poems of courtship, but are addressed to a woman whom Donne has already courted and won. They are not about her as an individual nor are they about Donne as an individual: they are about the oneness of two person, or about two persons who have become one, about what this oneness feel like, how it has been achieved, how it may be preserved. 5)

この上の文章の中の oneness を今ここで relationship に置き換えると，それはそのまま今まで述べてきた事柄にそっくりあてはまると思われる。oneness とは serious な恋における二人の男女間の relationship の究極の

ものではないだろうか。そうして，Donne の恋愛詩の中でも後期の作品，殊に愛妻との結婚後の作とみられる詩篇においては，この oneness の描述に主力が傾注されているのがみられるし，また一方初期のいわゆる evaporation of wit と呼ばれる詩篇群にあっては，この oneness に到る以前の段階にある詩人と mistress との relationship の分析と描写に専念しているのがみられるのである。

## 3

確かに，Donne は T. S. Eliot がいみじくも指摘しているように，どんな種類の経験をも貪り食うことの出来る sensibility のメカニズムを有していた。このことは，一見全く disparate にみえる混屯とした，不規則な断片的な諸経験を融合（アマルガメイト）して，ここに常にひとつの新しい世界 (whole) を創造することが出来たということに外ならない。Dr. Johnson 流にいえば，"discordia concors (=a combination of dissimilar images, or discovery of occult resembrances in things apparently unlike)"[6] を間然するところなく創造し得る sensibility の機構を有していたわけである。

これは，つまり，作詩を例にとって申せば，二つの経験（本義と喩義）との間に一見して，全然共通領域のないように見える radical なイメージを最初に提示し，漸次その共通領域を明らかにして，遂にはこの二者を本質的に結合して，"discordia concors" の成立を証明するということである。

では，この火と水ほどにも異なる二個のイメージを核融合させる装置は一体何であったか。

それは，とりもなおさず詩人の，灼熱状態の強靱な知性あるいは思考であった。一見して二つのイメージの類似性が判るような種類のものであれば，情緒や感覚の微温的な熱でもこの二者を融合することはさして困難事でもないかも知れない。だが，しかし，一見全く類似性のないと思える二つの radical images の間に共通の領域を開拓し，そこに "discordia concors" を証明するには，いやしくも，狂いのないごまかしのない弁証的論理の展開が前提されねばならないのは当然の帰結である。かくて，それは必然的

に共通領域を論証するということからして logical な展開イメジャリー (extended imagery) の形を帯びてくるし，更には，恐らくは論理的な決定論の様相を帯びてくるものである。

二人の恋し合う男女をコンパスや二本の平行線に喩えた Donne や Marvell の展開イメジャリーの醸成する一つの世界は，全く tenor と vehicle の区別さえ見分け難いほど完全に一体に同化しきった全然別個の世界である。この世界はコンパスや平行線以外の如何なる vehicle を用いても創造あたわぬ世界であり，これらは完全に一篇の詩の論理的外延を構成していることは言うに及ばず，同時に詩の内包的な texture ともなっている。その証拠には，詩篇の与える印象の全体とその prose-analysis の与える意味内容とを比較してみるのが最も手っとり早かろう。

まさしく，ここでは〝詩の本質は metaphor である〟とか，詩は〝イメージによる思考〟などという言葉が手にとるようにじかに響いてくるのを感じる。

Donne がこのように一見すると不自然とも思える radical な metaphor や simile を頻繁に創り上げ，それを詩作の基本原理に据えたということの根本には，今日までいろんな学者が既に指摘してきたように，G. Bruno が唱え，スペインの B. Gracian や E. Tesauro らによって発展せしめられた「対応の詩論」とか，当時流行のラメの論理学，更にはデオニシウスの書き物等々の諸影響が当然，認められるであろう。これらを認めるに少しもやぶさかではない。

だが，しかし，Donne の場合もっと根源的なファクターが存在したのではなかろうか。極めて heterogeneous な二種のイメージを結合せんとした詩人の心の底に潜んでいたものは，この二者を完全に融合するという目的意識の外に，もっと，この融合に到達するまでの，思惟にも比すべき intense な知性の灼熱による融合作用のひとつ，ひとつのプロセスを愉しむという衝動があったのでないのか。いわば，読者の cerebral cortex はもちろんのこと，己自身のそれをも手だまにとって弄ぶという，エピキュリアン的情熱というか impulse というか，とにかく，そんな何モノかがあった

のではないのか。

ところで，今まで，imagery の点からのみて来たが，ここでちょっと視点を変えて，一篇の詩の構成全体から Donne の詩のもつ logical な特質をみたら一体どうであろうか。

言うまでもないことだが，一篇の詩が imagery から構成されているということは明白だし，同時にそのイメジャリーが今までみてきた通りに consecutive で logicalな展開を示す extended metaphor であり simile であるとすれば，当然このような特質をもつ構成要素から成る一篇の詩全体も，これまた，consecutive な論理的な展開を示す argument となることは必然の帰結である。つまり，Donne の様々の恋愛詩とは，詩人〝私〟と〝恋人〟との relationship の弁証法的な論証のさまざの変奏曲であると大ざっぱに要約出来よう。

そうして，ここに Donne の詩がとりもなおさず，巧緻な論証の鎖の紐であるという第一義的な事実は当然，第二義的な意味での数々の特質をひき起こしてきた。第一に，それは作品中の詩語の性格を各側面から規制せざるを得なかった。

一篇の詩が有機的な，弁証法的に extend する論証とすれば，先ず第一に各 diction はその論証のための補助線みたいな存在となる。論証はきびしく勝手なごまかしや曖昧化は大禁物である。いや，こんなものがあってはどだい論証が論証でなくなる。かくて，作品中の各言葉は，例えば "flye" とか "tapers" という語は，古今の文学作品を通じてその身辺に纏いつけた様々の連想の光芒をちらつかせてはならず，それらは詩の context によって始めて一定の明確な意味を負荷されるのである。つまり，"flye" とか "tapers" とか，さらには "Phoenix" などの言葉も，その置かれた context によって規定された意味を負荷され，あくまでもその役割を 100% 忠実に果たす観念，いやむしろ名称とか記号というものとならざるを得ない。

例えば，"The Exstasie" の冒頭の数行に次のような Spenser 風の Postoral な風景美の描写がある。

Where, like a pillow on a bed,
　　A Pregnant banke swel'd up, to rest
The violets reclining head,
　　Sat we two, one anothers best.
　　(LL. 1-4)

この中の "violets" は確かに，観念ではなくて，ひとつのイメージと呼び得るものであろう。事実，この四行など，"A Midsummer-Night's Dream" のリリカルな次の一節を想起させるに十分である。

I know a bank where the wild thyme blows
Where oxlips and the nodding violet grows,
　　(Act II Sc. LL. 249-50)

しかも，"violets" はこの "nodding violet" と奇しくも同化せんとする程である。

ところが，"The Exstasie" を更に読んでゆき，第十スタンザに到ると，かくの如しである。

A single violet transplant,
　　The strength, the colour, and the size,
(All which before was poore, and scant,)
　　Redoubles still, and multiplies.
　　(LL. 37-40.)

ここでは早既に，冒頭のあの violet の花はその自然の美しさや可憐さをも色彩をも奪い去られて，早イメージであることを取止め，ただ，〝すみれ〟という観念，あるいは記号ともなり変わっている。"The Exstasie" の巧緻な論証の鎖をつなぐ一個の数珠玉に変わっている。

同時に，Donne がいかに論証の狂いなきに腐心したかは詩人の恋愛詩の

中に古代神話からの引用がほとんどないことからも判るというものである。たとえば，"Apollo" という言葉はただそれが存在するだけで，いわば automatic にひとつの神話的な association のムードを醸す。かかる点からも，(もちろん，当時の詩作の流行に対する反発も多分にあったろうが，) Donne は極力神話からの素材を排斥したようである。そうして，彼は，むしろ，それまで今だどの詩人の手垢にも染まず，その為それだけ純粋で，輪郭の明確な meaning だけをもつ，metaphysical な unfamiliar な語を好んで度々援用したのである。

ところで先に，イメジャリーのところで，Donne には simile や metaphor の論理的な展開をいささか遊び愉しむといった，いわゆる知性のエピキュリアン的な側面があると指摘したが，——一篇の詩全体の論理的な展開においてさえ，その余りに巧緻な間隙のない論証の鎖を追っていると，ふっとこんな考えが頭をかすめる。ある事柄の論理を追求していると言うよりは，唯 logic のための logic を，論証のための論証を愉しんでいるのではないかと。例えば，"The Flea", "TheWill", "Lover's Infiniteness" など知性の戯れが過ぎて無稽の感すら読む者に与える。"Lover's Infiniteness" などでは，"It is, but it is not after all" という思考法の反復によって論理が進められ，一篇の作品中に実に五度以上に亘って論理の屈折があり，第二スタンザを読み終った頃は，一体この logic のゆきつく destination はどこならんと首をひねらざるを得なくなる。専ら，destination に到る論理のプロセスにのみ心奪われて，それを愉しみ，いつまでもその destination に到達することを忘れ去っているかの感である。

この点については，E. M. Tillyard も，これを Donne の詩の rhetoric や structure のもつ最大の特質の一つとして次のように非難気味な指摘をしている。

> Being fascinated by the process of thought and having no faith in thought's leading anywhere he watches masochistically its painful convolutions. He enjoys throwing a spanner into his own mental machine

and watching what happens, or if you like, he agonises over the invisible ground he stands on, refusing to go forward.[7]

だが，Donne といえども，一篇の詩の consecutive な論理の展開をどこかで，いつか断つ必要のあることは十分心得ていた。一つの論理の鎖が一篇の完成した "Poem" として今や通用するという証のスタンプを打たねばならない瞬間のあることは知りながらも，そのタイミングを誤ったり，また，このスタンプの刻印にも相当する最終連や最終の二，三行が度々，冒頭から展開されて来た論理の進行方向に拮抗したり，逆流したりすることのあるのは少なくとも認めねばならい。だが，これは決して Donne の詩の価値や魅力を削減するのではなくて，却って劇的効果を収める上からはプラスの面が強いのではなかろうか。

以上の如き知性のエピキュリアン的情熱や指向性が，殊更に erudite な conceit を産む源泉ともなったろうし，また，あらゆる感情や情緒を，大抵の場合，一定のうちたてられた論理あるいは弁証の枠の中で叙述し規定するという現象をも惹起したのであろう。具体的な諸経験も denotative で logical な構成の中に流し込んで，それで枠を固めて押し出すという操作が Donne の詩作の主たる特徴といえるということは，究極のところ，吉田健一氏も素気なく示唆されているように，次のような事情に起因すると説くのが最も的をえているのではなかろうか。

Donne という詩人は，知性の異常な発達が感情の動きにも知的な操作の形を取ることを強いて，具体的な経験についても一応の論理を辿らければ，その実感が得られない結果，いわゆる，素朴なものの見物が却って不自然になる型の人間なのである。[8]

後 注

1) E. M. Simpson: A Study of the Prose Works of John Donne, p. 8. Oxford at the Clarendon Press, 1924.

2) Samuel Johnson: Lives of the English Poets, Vol. 1, p. 16,

The World Classics, 83, 1955.

3) T. S. Eliot: Selected Prose, p. 117. Penguin Books.

4) J. B. Leishman: The Monarch of Wit, p. 207. Hutchinson University Library.

5) ibid: p. 218.

6) Samuel Johnson: Lives of the English Poets, Vol. 1, p. 14.

7) E. M. W. Tillyard: The Metaphysicals and Milton, p. 32. Chatto & Windus, 1956.

8) 吉田健一：英国の文学 p. 94. 新潮社。

## A Select Bibliography

Donne, John: John Donne, Poems, ed. H. l'Anso Fausset. Everyman's Library No. 867, 1950.

Donne, John: John Donne, Poetry & Prose, ed. H. W. Garrod, Oxford, 1957.

Donne, John: The Poems of John Donne, ed. H. J. C. Grierson, 2 vols, Oxford, 1951.

Donne, John: The Poems of John Donne, ed. Sir Herbert Grierson, Oxford University Press, London, 1957.

Donne, John: John Donne, A Selection of His Poetry, ed. John Hayward. The Penguin Book, London, 1958.

Donne, John: Select Poems of John Donne, ed. K. Matsuura, Kenkyusha, 1957.

---

Bennett, Joan: Four Metaphysical Poets, Cambridge, 1957.

Brooks, cleanth: The Well-wrought Urn, New York, 1946.

Cox, R. G.: "A Survey of Literature from Donne to Marvell", A Guide to English Literature 3. London, 1956.

Eliot: Selected Prose, Ponguin Books (873), 1958.

Gransden, K. W.: John Donne, Longmans, Green and Co. (Men and Books), 1954.

Grierson, H. J. C.: Cross Currents in English Literature of the 17th century, Chatto & Windus, London, 1958.

Hunt, Clay: Donne's Poetry, New Haven, 1954.

Johnson, Samuel: Lives of the English poets (Cowley) The World's Classics, Oxford, 1955.

Kermode, Frank: John Donne, Longman & co. 1957.

Leishman, L. B. : The Monarch of Wit, Hutchinson University Library, London, 1947.

Louthan, Doniphan: The Poetry of John Donne, Bookman Associates, New York, 1951.

Matsuura, Kaichi: A Study of the Imagery of John Donne, kenkyusha Ltd, Tokyo, 1953.

Simpson, E. M. : A Study of the Prose Works of John Donne, The Clarendon press, Oxford, 1924.

Tillyard ,E. M. W. : The Metaphysicals and Milton, Chatto & Windus, London, 1956.

Tillyard, E.M.W. : The Elizabethan World Picture, Chatto & Windus, London, 1958.

Tuve, E : Elizabethan & Metaphysical magery, The University of Chicago Press, Chicago, 1954.

Walton, Izaak: Lives of Donne, Wotton, Hooker. etc. The World's Classics, Oxford, 1956.

---

佐山栄太郎：形而上詩の伝統，研究社，昭29.

〃　：十七世紀中葉の詩人，研究社，昭31.

篠田一士：邯鄲にて（現代ヨーロッパ文学論），弘文堂，昭34.

村野四郎：現代詩をもとめて，教養文庫，昭32.

西脇順三郎：T. S. エリオット，研究社，昭31.

日本英文学会編：英文学研究第二十四巻（昭21年）

深瀬基寛：エリオットの詩学，角川文庫，昭32.

〃　：批評の建設のために，南雲堂，昭31.

村岡勇：英詩のすがた——十七世紀英詩のイメージー，研究社，昭33.

アレン・テイト：現代詩の領域（福田陸太郎訳），南雲堂，昭35.

C・ブルックス：現代詩の伝統（猪俣・大沢共訳），南雲堂，昭35.